

TJFニュース

「TJFニュース」では、TJF（国際文化フォーラム）の活動報告や、事業に関連するさまざまな動きをニュースとしてまとめ、お伝えしていきます。

■日本の地域教育関係者の中国派遣事業 訪中で広がった日中教育交流の可能性

2008年12月、TJFは初めて「日本の地域教育関係者の中国派遣事業」を実施しました。事業の目的は、日本の地域や学校における中国理解および中国語教育を促進すること、中国の受け入れ地域や学校における対日理解および日本語教育を促進すること、日中の地域間および学校間の人的ネットワークの形成や学校間交流を促進することでした。

今回の派遣は、神奈川県および神奈川県私立中学高等学校協会の協力、ならびに中国国家漢語国際推進指導グループ弁公室（通称漢弁）の招聘により実現しました。12月22～25日の日程で、神奈川県内9校の私立中学校高等学校の理事長、校長、副校長、神奈川県学事振興課責任者、財団法人神奈川県私立中学高等学校協会責任者等14名とTJFスタッフ2名、合わせて16名を、遼寧省大連市に派遣しました。派遣先に遼寧省大連市を選んだのは、遼寧省が神奈川県の友好提携省であることと、大連市の初等中等教育における日本語教育が遼寧省ないし中国全土でももっとも盛んな地域であるからでした。3泊4日という短い日程でしたが、大連市教育委員会への訪問、中学校および高校への訪問（校長との懇談、授業見学、生徒との交流）、日本との交流を希望する市内の中高校10校の校長との懇談会、伝統文化の体験、市内見学など、充実した活動を行いました。

帰国後、参加者アンケートを実施した結果（次ページ参照）、全員が今回のプログラムに成果があったと評価しており、収穫があったことがわかりました。大連の学校との交流についても、ほとんどの学校が前向きに取り組む意向を示し、今後

形式にこだわらず、できる範囲内で、交流することを検討したいと回答しました。

一方、改善点として多く挙げられたのは、「全体的に質疑応答や意見交換のできる時間がもう少し少しかった」という意見でした。もっと現場の実情を知りたいという要望も多く出されました。そのほか、「日系企業をぜひ見学したかった」「もっと市内を見学したかった」「もっと私学の情報を知りたかった」という意見もありました。限られた日程のなかで、参加者がもっとも関心を抱き、意義を感じる教育関係者との交流、教育現場の視察により時間を割き、現在の中国の姿、日中の相互協力関係がわかる分野を見てもらえるよう、さらに工夫する必要があることがわかりました。

今回のプログラムの予想以上の波及効果として次の三つを挙げることができます。一つめは、参加者自身の中国理解が深まっただけでなく、「学校の同僚教職員に中国で見聞したことを伝え、交流の意義を啓蒙していきたい」という感想を書いた参加者が複数いたことです。二つめは、このプログラムの効果と意義を高く評価してくれた参加者から、次回も是非神奈川から派遣してほしいという要望が出されたことです。三つめは、生徒の中国理解や学校交流を促進しようと、上記の協会が主体となって、加盟校の高校生を対象とする合同中国語講座を開講することを検討していることです。

日本の学校教育における中国語教育の実施状況や中国との交流状況は地域によってさまざまですが、中国の対日理解の地域差は日本に比べはるかに大きいのが実情です。そうした事情を考慮し、より実質的でより深い教育交流を図るためには、友好都市協定を結んでいる地域間の交流を活性化さ



日中教育交流会で市内10校の中高校の校長と交流。



第一中学の日本語の授業を見学。

せることが有効であろうと考えています。こうした地域間交流の構想を軸に、本派遣プログラムを含む日中教育交流事業を実施していく予定です。(長江春子)

事後アンケートの結果(抜粋)

プログラム全体について

- ❖ 今回の事業は意義が深く、刺激も受け、将来のための布石にもなって、成功であったと評価している。
- ❖ 教育交流などの内容が充実していたと思う。このような企画は大連に限らず、遼寧省の他地域あるいは北京などにも拡大してよいのではないと思う。
- ❖ 多くの関係者がこのプログラムに参加することで、相互理解が深まるだけでなく、自国を、自分の学校を振り返ることができると思う。それは将来の日本のためにも、将来の世界のためにも必要なことだろう。誰かがやらなければならないことだと思う。
- ❖ 予想以上に有益なプログラムであり、参加してとてもよかった。
- ❖ 交流のスタートという面で良い成果を上げられたと評価したい。

参加して収穫があったこと

- ❖ 中国の発展ぶりを自分の目で見て体感することができた。また発展の基礎である教育を垣間見ることができ、日本の教育のあるべき姿を考えるヒントを得ることができた。
- ❖ 中国の経済発展の状況や社会情勢を垣間見ることができとても有益であった。また、現地の中高校生の様子やカリキュラムに接することができた。
- ❖ 科目の設定など日本を参考にしている点が多々あるように見受けられた。普通教育・職業教育の割合や選別、理工系志向など、高度経済成長期の日本との類似点が見られた。語学教育では、コミュニケーション能力の育成に力を入れている点など学ぶところが多かった。
- ❖ 大連の日本語教育の現場を見て、担当者の熱心さに感心し、その熱意を自分の学校の先生たちにも伝えたいと思った。実際の授業を見て、今の日本の生徒に失われつつある「授業を受ける楽しさ」があることを知り、反省した。

期間：12月22日(月)～25日(木)

主催：中国国家漢語国際推進指導グループ弁公室

実施：TJF

協力：財団法人神奈川県私立中学高等学校協会

後援：駐日中国大使館教育処、神奈川県

現地受け入れ機関：大連市教育局

参加者：神奈川県教育関係者14名、TJFスタッフ2名 計16名

■高校生の写真関連事業

高校生のフォト&エッセー、引き続き海外へ発信

1月25日「第30回よみうり写真大賞」の受賞作品が発表されました。本賞の高校生部門「フォト&エッセーの部」は、TJFが1997年度から2006年度まで、日本の高校生の生き方や暮らしを世界の高校生に発信するために開催していた「高校生のフォトメッセージコンテスト」を継承して、本年から実施されたもので、TJFも後援しています。

主催者の読売新聞社は「よみうり写真大賞」30周年の記念事業の一つとして、若い世代の応募を奨励するために、高校生部門に新たにこの「フォト&エッセーの部」を創設しました。審査員には「高校生のフォトメッセージコンテスト」の審査員長を務めた写真家の田沼武能氏も加わっています。

「フォト&エッセーの部」の入賞作品は25作品で、大賞は千葉県立柏南高等学校の小田佳奈さんが受賞しました。入賞作品は読売新聞紙上に掲載されたほか、よみうり写真大賞のウェブサイトで見ることができます(<http://www.yomiuri.co.jp/photogp/grandprix/30th/index-essay.htm>)。

本部門の入賞作品はTJFのウェブサイトにも掲載し、引き続き日英両言語で高校生の素顔を海外に発信する予定です。

(辻本京子)

■大連の日本語教育関連プロジェクト

大連プロジェクト初の中高校日本語教師訪日研修

2005年秋にTJFが大連市の教育行政者を含む「遼寧省教育代表団」を日本に招聘したことを契機に、大連市では小中高校における日本語教育を見直す動きが広がり、2006年春には大連市教育局より「小中高校における日本語教育奨励策」が発表されました。この政策を受けて、TJFは大連市教育局および大連教育学院の要請に応じて、大連市におけるさまざまな日本語教育事業に協力してきましたが、2008年



第一中学で日本語を学ぶ生徒と交流。

度は初めて大連市教育局の派遣というかたちで中高校日本語教師の訪日研修が実施されることになり、TJFはその実施に協力しました。研修は2009年1月28日から3月20日の日程で実施され、そのうち2月4日から3月13日は国際交流基金の協力を得て、研修生は同基金が主催する「中国中等学校日本語教師研修会」に参加しました。

来日したのは、大連市各区の教育局の推薦を受けた4名の中高校日本語教師で、「日本の社会に生きる日本語を話す人



(上)旅行代理店で自ら京都旅行の手続きに挑戦。(中央)金閣寺にて。(下)TJFにて、クラスアイデアを考える。

とのコミュニケーションに自信を持つ」ことと「いろいろな素材やいろいろな人のアイデアを共有して、自分のアイデアの幅を広げる」ことを目標に掲げ、精力的に研修に参加しました。研修の最終週には京都へ1泊2日の研修旅行に出かけましたが、この旅行は研修生自身がパンフレットや雑誌から情報を収集し、実際に旅行代理店へ行き、自分たちの要望を伝えて手配したものです。また、自分たちの授業スタイルを振り返りつつ、内容重視の教育について考え、研修生全員が自分のクラスアイデアを執筆しました。各研修生のクラスアイデアは、「くりっくにっぽん」の「クラスアイデア」コーナーに掲載する予定です。

研修期間中に作成した研修生のジャーナルには、「自分は日本語でいろいろなことができるということに気づいた」「日本人と日本語で話す勇気が持てるようになった」といった多くの経験や自信のことがばがつつられています。この日本での経験が大連市の日本語教育に還元されていくことを期待しています。

(大船ちさと)

期間： 2009年1月28日(水)～3月20日(金)
(2月4日(水)～3月13日(金)は国際交流基金の研修に参加)
会場： 国立オリンピック記念青少年総合センター、国際交流基金日本語国際センター、TJF
研修生： 林茂慧(大連市向応中学日本語教師)、張秀美(大連市第三十一中学日本語教師)、鄒淑静(大連市旅順口区第三高級中学日本語教師)、李晨(大連市第十六中学日本語教師) [敬称略]

■理事会・評議員会

2008年度臨時理事会及び第2回通常理事会・評議員会報告

2008年度臨時理事会

去る2月24日、臨時理事会を開催し、最初の評議員の選任方法および評議員選定委員会委員について審議し、承認されました。選定委員会委員は、石井米雄氏、馬場英彦氏、平野健一郎氏の3名です。

2月27日、最初の評議員の選任方法について外務省に認可申請を行い、3月4日に認可が下りました。

2008年度第2回通常理事会および通常評議員会報告

3月23日、午前に理事会、午後に評議員会を開催し、①

常務理事退任の挨拶



2001年4月に常務理事に就任して以来、昨年度の財団設立20周年をはさみながら、早いもので8年の歳月が流れました。この間、多くの方々のご指導、ご協力、ご支援をいただき、財団が目的とする事業を展開することができましたこと

とを、改めて御礼申し上げます。

昨年12月に公益法人制度改革関連3法が施行され、当財団では、今年6月に公益財団法人の認定申請を行うべく、鋭意、準備作業を進めているところです。当財団は、国内外の青少年の教育と育成に寄与するきわめて公益性の高い事業を行っていると自負しておりますし、また、公益認定の取得を財団の充実発展のひとつの大きな契機と捉え、民による公益の一翼を担うという気概を強くもって、これまで以上に質の高い公益活動を行っていかなくてはならないと考えております。

今後も、引き続き財団の活動について、ご教示、ご叱正をいただきたく存じます。

長い間、本当にありがとうございました。

……田所宏之

新常務理事の挨拶



このたび常務理事に就任いたしました岡崎です。当財団(TJF)に参りましたのは2009年1月からで、まだ3ヵ月余りですが、この間、第26回全日本中国語スピーチコンテスト(1月11日、東京・日中友好会館)と第2回クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会(3月21日、東京・千代田放送会館)に参加する機会がありました。

いずれも、TJFが力を入れている国内の高校を中心とする中国語教育、韓国語教育を促進する事業ですが、高校生たちの熱心な姿を目の当たりにして、TJFが進める事業の可能性を強く感じております。

TJFの新たな取り組み、日中韓それぞれの言語を、隣人・隣国の言語、「隣語(りんご)」として位置づける言語教育の連携事業にも期待をかけています。

いずれにせよ、TJF20年の歩みをふまえながら、時代の要請に応える公益性の高い事業を着実に進めて参りたいと存じます。今後とも私どもTJFに、ご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

……岡崎憲行

2008年度事業概況中間報告および収支予算の一部変更の件、②2009年度事業計画および収支予算の件、③任期満了にともなう理事・監事・評議員選出の件、④公益認定後の最初の評議員候補者の推薦の件、⑤定款の変更の案(新定款案)の一部修正および附属規程案の承認の件、以上5件の議案を審議し、いずれも承認されました。

③については、小林陽太郎理事、鶴田尚正評議員、若松常正評議員、高嶋伸和顧問、理事の田所宏之の退任にともない、岡崎憲行氏を理事に、加藤哲朗氏、野口文博氏を評議員に選出しました。

2008年度の事業はおおむね順調に進捗しました。昨今の経済情勢の影響を受け、2009年度はきびしい運営が予想されますが、いっそうの事業の充実、経費の節減、助成金の獲得等に努めていきたいと考えております。皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(田所宏之)

実施事業一覧(2009年1月・2月・3月)

- 大連市中学校日本語教師訪日研修協力・助成(1~3月/東京・埼玉・京都・横浜)
- 第26回全日本中国語スピーチコンテスト後援(1月/東京)
- 第30回よみうり写真大賞高校生部門「フォト&エッセーの部」後援(1月)
- 「くりっくにっぽん」ウェブサイト開設(1月)
- 『国際文化フォーラム通信』第81号発行(1月)
- 『小溪』No.39発行(1月)
- 話してみよう韓国語地方大会後援(2月/福島・鹿児島・東京・大阪)
- 第2回クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会共催(3月/東京)
- 第9回北陸地区高校生中国語発表会後援(3月/石川)
- 第9回高校生意見発表会後援(3月/東京)
- 『Takarabako』no.19発行(3月)
- 『ひだまり』第38号発行(3月)

お知らせ

TJFは2009年度も、小中高校生を対象とした海外の日本語教育や日本の外国語教育および多様な文化についての理解を促進する事業を継続するとともに、それらの教育分野における教育関係者間や小中高校生間の交流を促進する事業に取り組んでいきます。具体的な事業は以下のとおりです。

2009年度の事業計画一覧

A. 海外の小中高校における日本語教育と日本の文化についての理解を促進する事業

■教師研修事業

1. 大連市中高校日本語教師研修の共催（大連）
2. 大連市中高校日本語教師訪日研修への協力

■教師派遣事業

大連市中学校への日本語教師派遣

■教育関係者招聘事業

大連市教育代表団の日本招聘

■教材・資料・教案等の開発提供事業

1. 大連市中学校日本語教科書の共同編集出版
2. 遼寧省小学校日本語教科書の編集出版への協力
3. 日本事情・日本語授業案の提供サイト「くりっくにっぽん」の運営
4. 日本関連写真の提供サイト「TJF Photo Data Bank 日本編」の運営
5. 日本語教師向け英文情報誌『Takarako』の発行と情報提供サイトの運営
6. 日本語教師向け中文情報誌『ひだまり』の発行と情報提供サイトの運営

■日本語教育ネットワーク事業

1. 教師ネットワーク活動への協力
2. 会合・研究会・学会等への参加

B. 日本の小中高校における外国語教育と多様な文化についての理解を促進する事業

■教師研修事業

1. 高等学校中国語韓国語教師研修の共催（東京）
2. 高等学校中国語教師研修の共催（長春）
3. 韓国語教師研修の共催（福岡）

■シンポジウム等の開催事業

1. シンポジウム「日本の韓国語教育の過去・現在・未来」(仮称)の共催
2. フォーラム2009「日中韓の食文化」(仮称)の共催

■学習奨励事業

1. 中国語を学ぶ高校生の中国短期研修の実施
2. クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会の共催

■教材・資料・教案等の開発提供事業

1. 中国関連写真の提供サイト「TJF Photo Data Bank 中国編」の運営
2. 中国語教師向け情報誌『小溪』の発行と情報提供サイトの運営

■調査研究事業

「高等学校の中国語と韓国朝鮮語の学習のめやす」の作成

■外国語教育ネットワーク事業

1. 教師ネットワーク活動への協力
2. 会合・研究会・学会等への参加

C. 国内外の教育関係者間と小中高校生間の交流を促進する事業

■教師・学校・教育行政機関をつなぐ交流事業

1. 日本の地域教育代表団の中国派遣
2. 日中学校交流活動への協力
3. 日米学校交流活動への協力

■小中高校生をつなぐ交流事業

1. 神奈川県の中学生の大连派遣（教科書『好朋友』出版記念特別事業）
2. 中高校生の交流サイト「つながる」の運営
3. 高校生の写真の提供サイト「高校生のフォトフォトフォト!」の運営

■交流ネットワーク事業

1. 教師ネットワーク活動への協力
2. 会合・研究会・学会等への参加

D. TJF広報活動事業

1. 機関誌『国際文化フォーラム通信』の発行とサイトの運営
2. 事業報告書とリーフレットの発行
3. ウェブサイトの運営
4. 会合・セミナー等への参加

編集後記

http://www.tjf.or.jp/newsletter/kouki/kouki_j.htm

TJFでは国内外の小中高校生を対象とする外国語教育を促進する事業を行っているが、各国で外国語教育の共通の目標として掲げられているのは、コミュニケーション能力の獲得である。しかし、コミュニケーション能力とは何かということになると、その定義は多様である。日本の高等学校の学習指導要領では、コミュニケーション能力は「相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする力」ということになり、自己表現能力の育成が重要な目標の一つに位置づけられている。しかしコミュニケーションは自己と他者（情報・世界）の間で行うものである。言語運用能力として自己を表現できる力（話す・書く）や他者を理解できる力（聞く・読む）とともに、自他間の情報の交信、感情のやりとり、意見交換など、対話力が必要であり、他者とのつながりの実現が問われることになる。コミュニケーションはこうした三つの側面をもちつつ、三つの要素が一体化しているわけである。

さらにこうしたコミュニケーション能力は、単に言語そのものを習得しても身に付くわけではなく、考える力や自他の意見を調整する力、そしてそもそも自分の考えや気持ちなど表現したい内容をもっていることが大前提にある。そこにさまざまな知識や文化理解力も介在するわけである。したがってこれらをすべて含むものがコミュニケーション能力と定義することもできる。

本号の特集で取り上げた教育実践例における表現力も、文字どおりの表現する力というより、上記の言語教育における広い意味でのコミュニケーション能力と限りなく重なる広い概念として捉えられている。自己表現力はグローバル社会に生きる力の基本を成すものであり、教科を超えて身に付けたい力である。

特集の中では、教育における表現活動の三つのモード、すなわちコトバ（書きことばと話しことば）、モノ（ポスター、コンピュータなどの活用）、身体（全身を使った表現）(p.3) をツールに、①演劇的手法を取り入れ、他教科や特別活動と連携させた国語指導を行っている倉敷青陵高校、②国際交流や職場体験、農業体験などさまざまな体験活動を組み込んだ総合的な学習をモジュール化し、毎朝の読書活動と連携させ、学校全体で取り組んでいる東大和市立第三中学校、③課外活動で、カメラを活用し写真を撮ることを通じて部員のコミュニケーション能力や自己表現力を育てている大阪市立工芸高校の例を取り上げた。人生は自分探しの旅であり、他者との出会いの旅である。その道が交差するところにコミュニケーションが生まれる。その時まで自分を表現できるか、相手を理解できるか、そしてどこまで交わることができるか、その可否が人生を左右することにもなる。

中野佳代子

財団法人 国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM
(TJF)



国際文化フォーラム通信 82号
2009年4月発行

発行人・編集人 中野佳代子
デザイン・DTPオペレーション 飯野典子
フォーマット設定 鈴木一誌
出力・印刷・製本 凸版印刷（株）
校閲（有）天山舎

財団法人 国際文化フォーラム

〒163-0726 東京都新宿区西新宿2-7-1
新宿第一生命ビル26階
TEL 03-5322-5211 FAX 03-5322-5215
E-mail: forum@tjf.or.jp
<http://www.tjf.or.jp/>